

ブナハバチから ブナを守るために

●今、丹沢では

神奈川県北西部に位置する丹沢山地は県民の大切な自然であり、また重要な水源地域でもあります。ところが今、丹沢ではブナ林の衰退が深刻化しています。これに対して自然環境保全センターでは総合的なブナ林の保全対策に取り組んでおり、そのなかでブナ林の衰退にはブナ食葉性害虫のブナハバチが強く関与することが分かってきました。

●ブナハバチとは

ブナハバチとはハバチ（葉蜂）という昆虫の仲間で、5月頃に成虫が発生してブナの新芽に卵を産み付け、ふ化した幼虫は5～6月の約1ヶ月間ブナの葉を食べて育ちます。ブナハバチは大発生するとその地域のブナの葉を食べ尽くしてしましますが、県内では大発生が1993年に初めて確認されて以来、繰り返し生じてきています。このような激害を何回も受けたため、枯れてしまったブナも数多くあります。

「ブナハバチ」という名前は2000年になってつけられたもので、その存在が認識されるようになったのはつい最近のことです。このため、なぜ大発生するのかなどまだよく分からない部分が多く、生態の解明が急務となっています。

●当センターの取り組み

当センターではブナハバチの大発生原因の解明や防除対策に取り組んでいます。2007年はブナハバチの大規模大発生となり、丹沢のほぼ全域で被害が発生しました。そこで各地域の被害量を詳細に調べたところ、特に檜洞丸や大室山などの西丹沢地域で被害が激しく、8割以上のブナが葉をほとんど食べ尽くされるかそれに近い被害を受けたことが分かりました。

また、昆虫トラップなどを用いてブナハバチの生息状況を調査する手法を確立しました。この手法を用いたモニタリングによってブナハバチ発生量の年次変動が把握され、大発生の原因解明や発生予察へと繋がる資料が蓄積されると期待されます。さらに、他の生物への負荷を最小限に抑えつつブナハバチ密度を下げることでできる防除法への応用も検討しています。



葉を食べ尽くされたブナ
(2007年7月檜洞丸で撮影)



- ◀左 ブナの新芽に産卵中のブナハバチ成虫
(2007年5月保全Cにて飼育中の個体：体長7mm程度)
- ▲中 ブナ葉を摂食中のブナハバチ幼虫
(2007年6月保全Cにて飼育中の幼虫：体長15mm程度)
- ▶右 昆虫トラップ
(2007年5月丹沢山天王寺尾根にて：飛翔中の成虫が板に衝突して落ちると水をはったバケツに捕獲される)